医 療 連 携 ニ ュ ー ス
Medical Liaison News
発行日：2026年9月25日 No.45
発　行：地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪母子医療センター

## 地域とともに災害に備える

先日、熊本県で再び地震が発生しました。被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げるとともに、一日も早く平穏な生活が戻ることを願っております。地震はいつ、どこで起こるかわかりません。近年では、豪雨や台風などの自然災害に加え、医療機関を標的としたサイバー攻撃も大きな脅威となっています。



副院長
危機管理災害対策委員会委員長
和田 和子

当センターは、大阪府の特定診療(小児・周産期)災害医療センターとして、災害時の小児・周産期医療を担う役割を担っています。2018年の大阪北部地震では、被災した病院の患者さんの迎え搬送および受け入れを経験しました。この経験からも、災害時に医療を継続するためには、平時からの備えと関係機関との連携が何より重要であると認識しています。

一方、院内の体制や備えについては、継続的な点検と見直しが必要です。現在、さまざまな危機に際しても必要な医療を継続できるよう、BCP(事業継続計画)の改訂を進めています。計画を整えるだけでなく、実際の災害時に職員一人ひとりが状況に応じて判断し、行動できる体制を整えていくことが重要と考えています。

その一環として、今年度中には、大阪急性期・総合医療センターのご指導をいただき、より実践的な災害訓練を行う予定です。他施設の経験や知見からも学ばせていただき、訓練を通して当センターの課題を明らかにし、BCPや院内体制の改善につなげていきたいと考えています。



また、災害時の医療は一つの病院だけで完結するものではありません。地域の医療機関、消防、行政をはじめとする関係機関との連携が欠かせません。平時から顔の見える関係を築き、互いの役割を確認しておくことが、いざという時の大きな力になると考えています。

自然災害やサイバー攻撃を完全に防ぐことはできません。私たちもまだ学び、備えを重ねていく途上にあります。地域の皆さま、関係機関の皆さまとともに備えを重ね、災害時にも小児・周産期医療を継続するという役割を果たせるよう、一歩ずつ取り組んでまいります。

## 基　本　理　念

母と子、そして家族が笑顔になれるよう、質の高い医療と研究を推進します。

基本方針

- 周産期・小児医療の基幹施設として高度で専門的な医療を提供します。
- 患者さんとの相互信頼の立場に立った医療を行います。
- 地域と連携して、母子保健を充実させます。
- 母子に関する疾病の原因解明や先進医療の開発研究を進めます。

## 子どもの消化管内視鏡（カプセル内視鏡）

小腸は成人で約3～5mに及ぶ長い臓器であり、従来の上部消化管内視鏡や大腸内視鏡では全域の観察が困難であったことから、「ブラックボックス」とされてきました。しかし、カプセル内視鏡やバルーン内視鏡の登場により、小腸粘膜の詳細な観察が可能となり、小腸疾患の診療は大きく進歩しました。

カプセル内視鏡は500円玉大のカプセル型内視鏡（写真）を経口的に嚥下して施行する検査であり、鎮静や放射線被ばくを必要とせず、低侵襲で患者負担が少ないことが特徴です。小児領域においても、その安全性および有用性は数多く報告されており、原因不明消化管出血、クローン病、小腸ポリープなど、さまざまな小腸疾患の診断に有用です。




一方、低年齢児ではカプセルの嚥下が困難な場合が少なくありません。そのような症例では、「AdvanCE™ Capsule Endoscope Delivery Device」を用いてカプセルを把持し、上部消化管内視鏡下に十二指腸へ安全かつ確実に留置することが可能です。これにより、自力で嚥下できない小児においてもカプセル内視鏡検査を実施できるようになりました。



当センターでは本デバイスを導入し、クローン病の早期診断、病勢評価や粘膜治癒の確認、小腸ポリープの診断・経過観察に積極的に活用しており、クローン病をはじめとする小児小腸疾患の診療の質向上に努めています。

（消化器・内分泌科　萩原 真一郎）

## NST（Nutrition Support Team：栄養サポートチーム）の活動紹介

小児患者さんの栄養状態は、成長発達のみならず、入院の経過に大きく影響します。

当センターのNST（栄養サポートチーム）は、複雑な基礎疾患により栄養管理が難しい子どもたちに対し、最適な栄養療法を提案・実践する多職種チームです。



現在のメンバーは、小児外科、消化器・内分泌科、新生児科の医師をはじめ、管理栄養士、看護師、薬剤師、臨床検査技師で構成されています。さらに近年は口腔外科医師も加わり、より多角的なサポート体制へと進化しました。

活動の大きな柱の一つが、様々な栄養評価による必要エネルギー量の推定と適切な栄養投与です。心不全、呼吸不全などさまざまな臓器障害を持つ児、医療的ケア児や集中治療室（PICU）の患者さんなど、予測式では計算が難しいケースでも、一人ひとりに必要なエネルギー量を正確に把握し、過不足のない栄養投与を実現しています。

また、経腸栄養の工夫にも力を入れています。酵素を用いて米飯を液状にした「ベースライス」などを導入することで、栄養剤のみの場合と比べ、便性の改善や逆流防止といった消化管機能の維持に大きな成果を上げています。

さらに最近では、口腔外科医師との連携により嚥下機能を適切に評価し、静脈栄養から安全な経口摂取へと移行するための支援にも積極的に取り組んでいます。

私たちは今後も引き続き子どもたちのシームレスな栄養管理を目指してまいります。

（NST委員長　清水 義之）

## 地域へ届ける「命の授業」

当センターでは、思春期保健相談士の資格を持つ助産師を中心に、子どもたちが「自分の身体と心を大切にしながら生きていく力」を育むことを目的に、“命の授業”として出前授業を行っています。




授業前には学校の先生方と打ち合わせを行い、子どもたちの発達段階や地域の特徴、学校ごとの課題を踏まえ、内容をオーダーメイドで構成しています。授業では、性の基礎知識や思春期の心身の変化、友人関係やお付き合いのあり方などのお話をしています。それらは、妊娠・出産、子育て、将来の健康を見据えたプレコンセプションケアにつながっていると考えています。




性教育は「恥ずかしいもの」ではありません。「自分はどのように生まれてきたのか」「自分を守り、大切にしながら、他者をどう尊重するか」を考える“命の学び”です。子どもたちが安心して質問できる、温かい雰囲気づくりも大切にしています。

また、助産師は、妊娠・出産・子育てを支えるだけでなく、女性、男性、そして家族の一生に寄り添う専門職であることも紹介しています。
これからも医療の専門性を地域に届け、子どもたちの健やかな成長を支えてまいります。

## 医療的ケア児支援センターはハミング・オアシスに出展しました［2026.8.8(土)9(日)］

大阪府医療的ケア児支援センターは、
医療的ケア児や発達等に課題があり
支援が必要な子ども（スペシャルキッズ）と
ご家族が楽しめるイベント
「**ハミング・オアシス2026**」に
出展しました



当センターはガチャガチャや風船配布、プチ相談を行い、親子やきょうだい児の笑顔が見られました。他機関の支援者や医療的ケア児・家族との交流が生まれたことは大きな成果でした。

また、センターや圏域支援拠点、医療的ケア児等コーディネーターの役割を紹介する展示を実施し、「地域にコーディネーターがいることを初めて知った」という声も寄せられました。

今後も医療的ケア児を支援する基幹センターとしての取り組みを進めてまいります。

## 保育士間の連携強化による保育の質の向上

現在15名の保育士が在籍しており、新生児から学童までの幅広い年齢の子どもたちと関わっています。保育士の人数が増えた分、様々な視点の保育の検討や根拠を持った保育の提供、実施した保育の振り返りを行い、保育士自身の能力を高めていく取り組みも進めるようになりました。



具体的には、子ども一人ひとりへの理解が深まり、保育内容にも幅が広がるようになりました。また、保育士間で意見を出し合う場面も増え、これまで当たり前と思っていた保育を見直し、改善する機会にもなっています。さらに、保育の向上を目指して定期的に保育士会議を行い、研修や事例検討、支援内容の振り返りと改善に取り組んでいます。

今後も、子どもと家族の笑顔が少しでも増えるよう、『こどもまんなか保育』を継続していきたいと思います。



## 第17回きっずセミナー［2026.8.15(土)］

例年、大きな反響をいただいている「きっずセミナー」を、今年度も開催しました。

本セミナーは、未来を担う子どもたちに将来について考える機会を提供することを目的として2010年から継続して開催しているイベントです。子どもたちは制服に着替えて、医療現場の仕事を体験してもらいました。

今年度は全9コース設け、合わせて約450名という、定員を大きく上回る数のお申込みをいただきました。

コース　・医師(新生児蘇生)
・医師(手術)　・医師(救急救命)
・看護師　・助産師
・薬剤師/臨床検査技師
・放射線技師　・管理栄養士　・研究者



抽選で選ばれた計166名の子どもたちが参加してくれました！





## プレパレーションブックの紹介（こどものページ）

当センターのホームページには受診されるこどもたちが少しでも安心して来院できるように、**こどものページ**があります。

こどものページの中には、病院で受ける検査や処置などについて心の準備を行えるように**プレパレーションブック**があります。

「さいけつ」「エックスせんけんさ」「CT」「MRI」「えこー」などをこどもたちがイメージできるように当センターオリジナルキャラクターモコニャンのイラストや写真でわかりやすく説明しています。



お子さんが安心して処置や検査をうけるためにできることをまとめた「**プレパレーションガイド**」も活用いただき、こどものがんばる力を引き出してあげてください。

## ボランティア活動の紹介

当センターでは、病院での生活を余儀なくされた子どもたちにとって、病院が「当たり前の生活の場」として感じられるよう、ボランティアがさまざまな日常経験を支援する活動をしています。

両親以外が病室に入ることが許されなかった30年前、有志が集まり入院中の子どもたちに遊びを提供しようと始まりました。

病院に居ながらも子どもたちがより幸せな日々が送れるよう、患者さんやご家族のニーズに沿った支援、そして子どもたちにやさしく笑顔で寄り添う活動をしています。





現在は115人、14グループがそれぞれの得意分野を生かした活動を行っています。

♡外来待合での遊びの提供や安全の見守り
♡患者のきょうだい児支援
♡医療補助具などの縫製作業
♡絵本の読み聞かせ
♡入院中の患者への移動図書活動
♡ピアノ演奏活動
♡センター内の壁面装飾
♡庭の花の手入れ　など

朝の外来では、ボランティアがやって来るのを待ちかねて駆け寄ってくるお子さんもおられます♪

### 交通のご案内




**診 療 時 間：平日 9 時～17時30分**
**予約受付時間：平日 9 時～19時00分**


地方独立行政法人 大阪府立病院機構
大阪母子医療センター　患者支援センター
〒594-1101　大阪府和泉市室堂町840
【初診専用】　TEL：0725-56-9890（直通）
FAX：0725-56-5605
【そ の 他】　TEL：0725-55-3113（直通）
FAX：0725-56-7785
【医師相談窓口】　E-mail：chiren@wch.opho.jp


**医療対象者ホットライン**
（※24時間受付直通）

PICU
0725-56-1070

小児がん・白血病
0725-57-7677

心疾患
0725-56-3833

この広報誌に関するご意見・ご要望はFAXにて患者支援センターにお寄せください。